

単位認定試験雑感

加藤 秀俊

放送大学の特色はかぞえあげてゆけばきりがないが、わたしのみるところでは、この大学が従来の大学と基本的なことなるのは、入学がやさしく、卒業がむずかしいというところにあるようにおもわれる。とにかく、放送大学は一定の資格さえそなえていれば先着順に入学を許可するのだから、入学にあたっての試験というものはいっさい存在していない。また高校卒という資格がなくても、特修生の制度を利用すれば、学歴とも無関係にだれでも入学できる。アメリカの大学などでも入学は比較的やさしいといわれるが、それでもSATのようなテストを基本にして入学を許可するわけだから、まったく無差別にだれでも入学を許可するという放送大学の制度は世界にさきがけた完全自由入学制度であるといつてさしつかえない。

したがって、大学ということばをきくと、すぐに入学試験、そして一般に「試験」といったことばを連想するこれまでのわれわれの固定観念からすると、放送大学はまさしく革命的な手法によって設計された制度である、といつてさしつかえあるまい。だいいち、一学年目の全科履修生の定員が4,000名であったのに、あっというまに9,000名に応募者がふくれあがってしまったのも、こうした点とけっして無関係ではないとわたしはおもう。じっさい、かんがえてみれば、ついきのうのこのようにおもわれるが、4,000名の入学定員を、いっきょに8,000名にひろげるという大決断がくだされたのも、ふりかえてみれば、ほぼ1年むかしのことになってしまった。そしてこれらの応募者たちの入学願書1枚1枚のなかには、自由な学習意欲がみなぎっていることがうかがわれたのである。それだけに正規の大学としての放送大学がその真価をためされるのは厳正な単位認定試験にかけられていたし、現在でも、われわれにとって高い水準を維持しながら、いかにして単位認定をおこなうかは最大の問題点としてのこされているようにおもわれる。入学試験がないのだから、単位認定で

極端に点数をあまくするのは大学としての威信をうしなう結果になりかねないし、あまりにもきびしい試験で単位認定をおこなうということになると、せっかくの学習意欲を挫折させるという結果にもなりかねない。大学設置基準に適合した高度の水準を維持しつつ、どうじに生涯教育期間としての役割をはたさなければならないという二重の社会的要求にこたえながら、単位認定をおこなうということは、きわめて困難な作業であったし、こんどもそうありつづけるにちがいない、とわたしなどはかんがえている。

そのうえ、大学には大学としての自治があり、またそれぞれの担当講師の学問的自由が保障されていなければならないから、機械的に単位認定合格者の比率についてガイドラインのようなものを設定することもゆるされない。極端ないいかたをすれば、合格者をひとりもださない、あるいは合格者がひとりもあらわれないようなむずかしい試験が課せられることがあっても、逆に、100%が合格するような試験問題が設定されても、それは個々の教員の学問の自由の領域にぞくする。第一学期の単位認定試験はそうしたもろもろの困難をかかえながら、とにかく1985年7月中旬から下旬にかけて、関東6ヶ所の学習センターを中心におこなわれ、無事終了した。

放送大学では、それぞれの履修科目について、学生は中間時点で通信指導を受けなければならない。そして通信指導を受けた学生だけが単位認定試験を受ける資格をあたえられる。こまかい数字はここでは省略するが、全体を平均すると、登録学生の約6割が通信指導を受け、その有資格者の8割ほどが試験場で試験を受けた。最初の通信指導でおよそ4割が脱落し、また試験資格をもちながら、試験場にあらわれなかったひとが2割ほどいるわけだから、じっさいに試験を受けたひとは全学生のほぼ半数ということになるであろう。そして、受験者のうち、合格者が平均して50%ていどであったから、全学生の比率からいうと、約3割の学生が単位認定試験に合格したという勘定になる。この数字が高いか低いかについてはおおいに意見のわかれるところであろう。もしも、通信指導を受けなかった4割の学生を、学生登録はしたものの、まったく休眠状態にあるグループとしてかんがえるなら、この合格率はきわめて高い。だが、

逆に、この4割が潜在的に強い意欲にもえながら、なおかつ通信指導をうけるだけの余裕がなかったのだとかんがえるのならば、合格率はかなり低い、と評価することもできるだろう。そのどちらかがただしいか、現時点ではわたしにはわからない。

しかし、わたしの担当する科目の通信指導の内容をみていると、4ヶ月で15回にわたる講義をきき、印刷教材を読み、参考書を読んで、小論文をまとめる、というのはかなりおおきな負担であったらしいことがありありとうかがわれる。じゅうぶんに勉学する余裕がなかったから再提出したいという再提出希望の学生からきた手紙などをよんでいると、たしかに通信指導のための勉学がそのような負担になっているらしいことはじゅうぶんにわかる。とりわけ学生といっても、中高年のひとびと、とりわけ職業をもちながら勉学している学生たちがその大半をしめていることをかんがえれば、通信指導をうけなかったひとびとが怠情であったなどと即断することはまちがっている。けっきょくのところで、すべての学生が学習意欲にもえながら、なおかつ通信指導についてゆけなかった、というのがじっさいなのではあるまいか。したがって、わたしとしては、全学生のおよそ3割が単位認定に合格したということは、放送大学のありかたをかなりはっきりしめす重要なインデックスなのであろう、とかんがえたい。

この数値が二学期以降どのような変化をみせてゆくかは、現在の時点ではいっこうにわからない。さきほど述べたように、100%にちかい合格率がでた科目については、2学期以降かなり問題をきびしくしてゆく傾向がみられるようだし、逆に、合格率ゼロにちかいような科目に関しては、試験問題をややゆるやかにする、という動きもあるらしい。そしてそうしたことをかんがえればかんがえるほど、単位認定試験というのはたしかに学生にとっての試験であったが、同時に、それぞれの講座の担当講師がこの単位認定試験をつうじてみずからを試験したということにもなるのだろう、とわたしはかんがえる。他の講師がどのようにこの結果をうけとめているかについて、わたしは多くをしらない。わたしじしんについていえば、1学期の単位認定試験は問題がすこしやさしすぎたのではないか、という反省をしいられた。じっさいある試験場で、ひとりの

学生から、「あんなに参考書もたくさん読んだのに、こんなに試験がやさしいと気がぬけてしまう」という感想を直接耳にしたりもした。意地悪で不合格にするというのはけっしてゆるされることではない。しかし、この学生のことばかりからもうかがわれるように、周到な準備もし、勉学にはげんできた学生をかえって落胆させるような安易な問題のだしかたをすることもゆるされてはならないと思う。だから単位認定試験は、すくなくともわたしにとってわたしじしんの試験であった、というおもいがする。

放送大学の教職員の大部分は在来型の大学からいきなりこのあたらしいシステムの大学に移ったひとびとばかりである。わたしもその例外ではない。そしてわたしたちのころのなかには、依然として、放送大学に転勤する以前の大学のイメージ、学生のイメージがふかくやきつけられている。しかも放送大学は在来の大学とまったくことなつた性質の大学なのだ。これまで若い学生たちだけを相手におこなってきた期末試験とはまったく異質な試験がここではおこなわれている。いや、すくなくとも、おこなわれなければならない。それに通常の大学だと、学生ひとりひとりの個体識別がなんらかのかたちで可能だが、放送大学は放送というメディアをつうじて、目にみえない学生たちを相手に授業がおこなわれている。したがって学生たちがなにをかんがえ、どのていどの勉強をしているか、わたしたちにはほとんど見当がつかないのが事実だ。もちろん大学の電算機に入力されている学生ひとりひとりについての個別データからおよそのプロフィールを想定することができるが、なにしろ顔をみたこともない学生を相手にしての試験なのだから、卒直に言って、単位認定試験は学生と教員とのあいだの期待値のゆきちがいが随所にみられたようにわたしにはおもわれる。そうした期待値の交錯を調整をしてゆくことが放送大学にとっての今後の基本問題のひとつになるであろうことにはうたがう余地もなさそうである。

とはいうものの、はじめての単位認定試験であるから、大学側はあらゆる事態にそなえて、異常ともみえるほどの態勢をととのえた。学生証をわすれてきた学生にたいしてどのように対応したらよろしいのか。受験票を紛失した学生

はどのようにとりあつかうべきか。不正行為があったばあいの処置はいかにするべきか。また高齢者が多いことをかんがえあわせて、試験中に急病人がでたばあい、どんな処置をとるべきか。単位認定試験がおこなわれる数週間前から、大学の教務委員会ではあらゆる事態を想定して、ほとんど過剰とでもいえるべき準備態勢をととのえた。教職員はもとよりのこと、事務職員も全員2週間にわたって単位認定試験がとどこおりなく進行するように、全学あげてのきびしい準備がおこなわれていたのである。そしてあらゆる事態を想定したとしても、その「あらゆる」にふくまれない状況の発生はだれにも予知できなかった。だから、正直なところ、わたしなどにしても、この試験期間中はじぶんでもかつて経験したことがないほど緊張感に包まれて毎日をすごした。学長をはじめ、執行部の責任者たちの緊張はわたしなどよりもはるかにおおきい。連日、試験実施本部につめっきりの責任者たちは、日をおって疲労の表情をふかくしておられたことをわたしはいまでも記憶している。

だが、じっさいに幕をあけてみると、試験はきわめてスムーズにほとんど事故をおこすことなく無事に終了した。最終日の最終時間が終了し、各学習センターから試験終了の電話のベルがなりおわった瞬間、試験本部につめていた責任者たちに、それまでのはりつめていた緊張感から解放されたどよめきがわきおこった。放送大学の学生たちは大学当局が想定していたより、はるかに優秀で堅実だったのである。

じじつ、わたしなども各学習センターで試験監督をしながら、いままでの人生でこんなにもさわやかな試験を経験したことはなかった、とみずからにいいきかせるようになっていた。通常の大学だと、試験のときでさえ、学生たちは教室のなかで、かなりザワザワしているのに、放送大学の学生のばあいには、試験場内は静寂そのものである。答案をかきおえて、提出するときに、解答用紙を両手でささげるように持参し、「ありがとうございました」と、一礼して去ってゆく学生たちをみていると、やはりこの大学の学生はすばらしいとかんがえないわけにはゆかない。教室のなかに身障者がひとりでもいると、学生たちはさきをあらそって、その身障者たちに道をゆずり、エレベーターの世話ま

でみてくれる。人間としてあたりまえといえばあたりまえのことだが、こんなにも礼儀正しく、真剣な表情で受験している学生の姿というものを、わたしは過去30年にわたるじぶんの教職歴のなかでみたことはなかった。

そうしたすべてをふくめて、わたしは第1学期の単位認定試験はその結果はともかくとしてすばらしい成功であったとおもう。もちろん、まえにのべたように大学としてはこの1学期の試験から多くのものを学び、その結果を土台にして、この大学の品格をくずすことなく、さらに改善への道を模索中だが、すくなくとも、このようなすばらしい学生たちがあれだけ熱心な勉強をつづけているかぎり、放送大学の将来はあかるいものであろう、とわたしはかんがえる。すくなくともわたしたちは、学生たちのもっているあの真剣さをうらぎってはいけない。なんべんもくりかえすようだが、単位認定試験は学生をためす機会であるというよりも、教員がみずからをためし、みずからを採点する機会であったのではないか。第2学期単位認定試験を2週間後にひかえて、わたしは学生に問う以前にみずからにたいして闘いつづけているところなのである。